



Reviewer

有馬太郎 Taro Arima

(北海道大学口腔機能学講座リハビリ補綴学教室)

歯科医師免許を取得し臨床に飛び出したころは、知識は一応あるが経験がないので、患者の歯の保全のために齶蝕と歯周病ばかりに目がいってしまう。教科書に「歯の喪失の主原因は細菌感染である」ことが強調されているからである。しかし、臨床経験を積んでいくと細菌の除去をいくら徹底しても歯の喪失を阻止できない症例に出会うことが増えてきて、原因がわからず苦慮をする。歯と歯の間に起こる「力」の存在だ。歯科専門用語では「咬合性外傷」とされ、これにより、

1. 歯の問題：磨耗，咬耗，不正咬合，歯の破折，修復物の破損や脱離
2. 歯周組織の問題：歯槽骨吸収
3. 顎関節の問題：筋筋膜疼痛，関節痛，関節雑音，顎関節変性，筋収縮性頭痛

が起こりうるとされている (Rugh and Lemke. A Handbook of Health Enhancement and Disease Prevention. 1984).

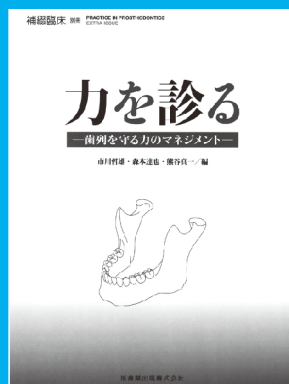
本書籍はこの、発生状態をチェアサイドでは見ることがない、見ることができない咬合性外傷とその原因、対処

法について、ブラキシズムを中心にまとめている。

本書籍はまず「力の問題点」について臨床家より症例報告され、「力に対する生体の反応」について研究者より研究結果と解説があり、ついで「口腔内所見より得られる力の情報」について臨床家・研究者双方より提示があり、最後に「力への対処と結果」について臨床家からの提案、という構成になっている。

臨床家のパートはすべて、臨床上の疑問、超長期にわたる症例の報告、臨床インプレッション、そして考察であるため、読者は長期間にわたる診療の疑似体験ができる。また、素材・情報が豊富であるため、読者なりの考察を巡らすことが可能である。しかし反面、超長期的であるがために目的、処置法、考察、が恣意的となる傾向がある。また、貴重な写真素材に対し、少し説明が足りないときがある。

一方、研究者のパートは彼らの基礎・臨床研究成果と過去論文レビュー結果の紹介となっており、非常に冷静



A4 判変，170 頁
定価 6,615 円
(本体 6,300 円+税 5%)
医歯薬出版刊

でシンプルな記述で、すべてがエビデンスに基づいているので信頼がある。そしてその分、臨床への応用に欠けている部分が少し存在するのも事実である。

上記より、ビギナーの先生方はそのままシンプルに読んで、臨床経験を擬似的に積み、また研究者のエビデンスを知識として習得していけばよいし、本分野のエキスパート先生方は知識の整理と、臨床所見や写真、治療経過についてその裏で何が起きているのか考察するための「あそび」が含まれているため、それを楽しめばよいという、どの先生にも購読する価値のあるものに仕上がっている。

何よりも本書籍は歯科臨床における「力」について、臨床家と研究者どちらの立場からも紹介があり、このようなコラボレーションは初の試みである。今後はさらなる密な連携により、お互いの研究・報告内容についてディスカッションがより多く含まれることを期待する。本書籍を購読する価値があるものとして推薦したい。